

III

ベネデット「序」¹⁾

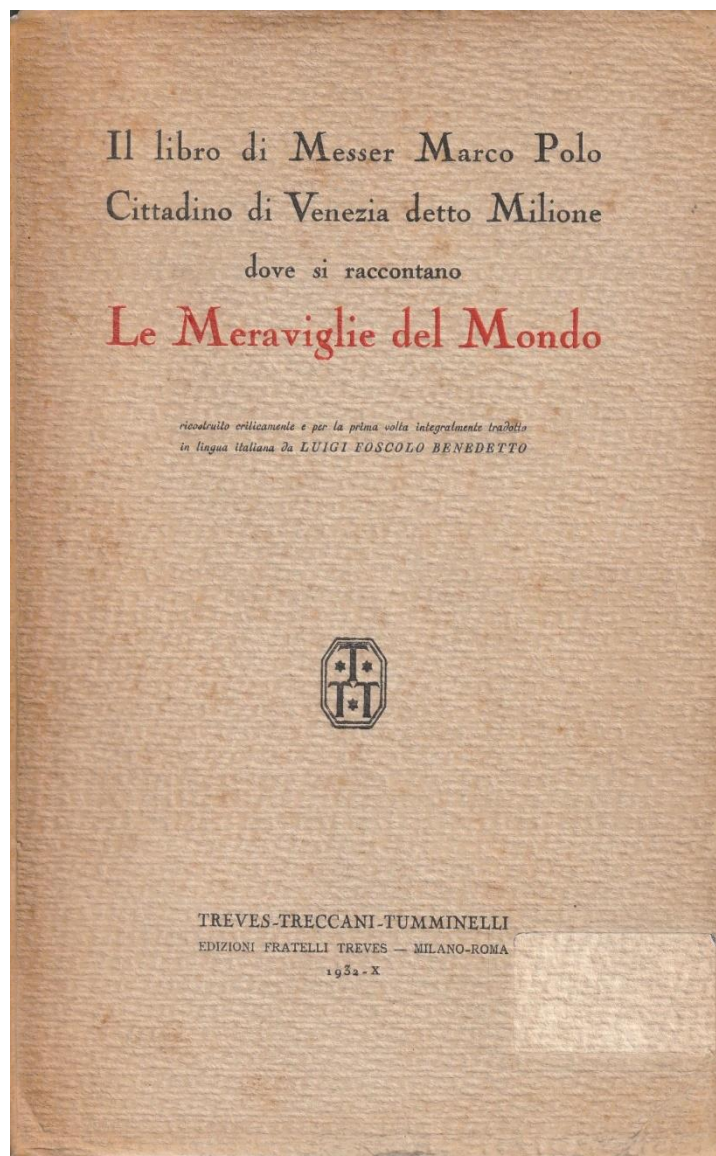


図1 ベネデット版イタリア語訳表紙

マルコ・ポーロは、単に自らの旅を我々に物語るだけの一介の旅人ではない。数奇な家族的運命の巡り合わせにより東方に育ち東方に生きた人間、永くモンゴル宮廷、当時存在した最大の帝国、に仕え、かくて広大で多様なアジアと直接に絶え間なく接していた人間である。一千二百九十八年、四十四歳、ジェノヴァの獄にあってそれまでの行動人としての暮らしから引き離され、書くことでその徒然を紛らわせていたとき、彼が意図した目的とは、ヨーロッパにアジア世界の全体像を与えること、当時その彼方に我々が孤独と怪物しか見なかった大平原や山脈の向こうに、どれほど激しく驚くべき生が生きついているかを西方人に聞かせること、であった。その題材の広さと新しさは彼に分析的な並べ方を強い、往々にしてその作品に単なる旅行記のような外観を与えてはいるが、彼の書は一つの総合である。総合がすべからくそうであるごとく、一つの感情によって統一されている。すなわち、自分が一つの強大な現実に関与したという誇りであり、それを明らかにせんという自負である。

一見したところその作品は、本質的に商業用に使われたかに見える。いかにもマルコ・ポーロは商人であった、事実においても精神においても。通商に身を捧げたヴェネツィア貴族の出である。わずか十五歳の彼をタルタル人のグラン・カーンのもとに伴い、二十年にわたる東方滞在中常に傍らにあった父ニコロと叔父マッテオは、マルコ自身が語るごとく、宝石商人だった。彼らは最初、名目上はラテン帝国の首都であったが事実上大ヴェネツィア領の都たるコンスタンチノーブルに居を構え、次いで当時それに劣らず重要であり、もちろんラテン帝国崩壊後はより安全だった商業中心地クリメアのソルダイアに移った。ソルダイアには長兄老マルコが、一千二百八十年になお彼らとの「兄弟商会」の形で店を持っていた²⁾。ラテン世界と果てしないタルタル帝国、かつて古きヨーロッパに津波のよう襲い掛かった恐るべき人々の海、その両世界の接するはるかな辺境で、彼らはまだ誰も踏み越えたことのない国境の彼方に自分たちの商業活動にとっての新たな地平を直観的に見て取り、神秘的な約束に満ちたその世界と対峙したのだった。そして、その世界は彼らを飲み込んでしまった。最終的にヨーロッパに帰ってきたのは三十年後のことだった。彼らはかつてと同じ商人だったのだろうか、我々には分からない。若きマルコは、父たちが行っていたかもしれない商業行為を

どの程度手伝っていたのだろうか。マルコ自身の語るところによるかぎり、彼は東方にある間ずっと、もっぱら長期に及ぶ困難な使節行の任にあたる帝国役人だったようである。一主要都市、揚州を三年間治めていたことが知られている。が、マルコも晩年にはヴェネツィアで商売に携わっていたことは疑いなく、さほど金回りのよくない親戚の事業に融資したり³⁾、叔父マッテオともどもコンスタンチノーブルでの取引に資金的に加わったり、小売り商人に品物を調達したりした(一千三百十一年に躑香の一部の代金未払いをめぐってパオロ・ジラルドに勝訴している)⁴⁾。死後作成された、鍵の掛かった手文庫や胡桃の木造りの大きな葛の中から発見された遺品のリストは、彼が高価な織物や香辛料の商売をしていたらしきことを窺わせる⁵⁾。故国への帰還後すぐ武装商業に携わっていたというのもありえないことではない。年代記作者ヤコポ・ダクィは、マルコはラヤツォ [ライアス] 沖合で商用ガレー船に乗っていたところを、ジェノヴァとヴェネツィアの商船隊同士の衝突でジェノヴァ人に捕らえられたと述べている⁶⁾。この記事は無視されるべきではない。マルコをランバ・ドーリアによってスペルバ [誇り高き国=ジェノヴァ] の獄に引き立てられた七千人の囚人の一人とする記事はずっと後年のものだし、全く疑いないというものでもない⁷⁾。船隊同士の衝突は——その必要あって通常武装しており——クルツォラ以前も稀でなかったに違いない。それにあの時代の記録というのは、周知のとおりおよそ詳細正確というには程遠いものだった。

作品はといえは、これまた疑いもなく際立った商業的メンタリティーを示している。どんな形であれ商売に関係する情報はすべて眼に付くように構成されている。交易についての幅広く直接的な知識のみならず、あらゆる形の商業活動に対する深い関心、その最も大胆で広範な形態に対する熱狂的なまでの賛美が見られる。商売にはたとえその東方滞在中マルコ・ポーロは自らは携わらなかったにしても、通り過ぎる国々を商人の貧欲な驚きの眼で眺めていたことは確かである。視線を止めるのは、とりわけ高い商業的価値をもったもの、あるいはもち得るものの上だし、チン [チャイナ] 海の島々について語るときの彼の心からなる叫び、「それら島々にある黄金や他の高価な品々の量たるや、その値打ちは全くもって驚くべきものだ！」⁸⁾をもって、全巻のエピグラフとすることも出来よう。彼の書は東方の富の目録である。さも玄人らしく、往々にして感に耐えぬごとく、マ

マルコは素晴らしい級毯・美しい金糸絹糸の織物、真珠・ルビー・サファイア・トパーズ・珊瑚・象牙、カンバルクに日々入荷する千台分の絹、金を産する川、銀やラピスラズリの鉱山、銘木・香辛料・最上質の皮・薬味、などのことを語る。その本からは無限の財宝のきらめきが輝き出ている。そうした富のいくつかは遠くの島々に隠し護られ、外国の商人は誰一人近付くことも叶わない。例えばチパングで、そこでは王宮の屋根は金で葺かれ、死者は皆口に一粒の真珠とともに埋葬される。他の富は未踏の山中に忘れ去られたかのごとく、外国人には原住民の敵意と有毒な空気ゆえに近寄りがたい。それでも、いくつかはもう世界中に広まっている。ヨーロッパの商人たちはそれをもうエジプトやシリアや大海の市場で眼にしていたが、その悠かな故国ではいかに豊富にあり、またいかに信じられないくらい安いかを想像することはなかったし、運ばれてくるのに要した奇跡のごとき勇気と才覚と努力のことを正しく理解することもなかった。が、マルコは我々を原産地の市場に案内してくれる。例えば、一ヴェネツィア・グロッソで最も美しい中国磁器が三つも買える国、同じく最高の新鮮な生姜が四十リブラ得られる国、五サッジョの銀か数個の塩の塊で純金一サッジョが手に入る国に……⁹⁾。また専売・貢納・運賃・税関、いろいろな地方で流通している様々な種類の貨幣、住民たちの大小様々な歓迎ぶりなどについて教えてくれる。商人に友好的な王を褒め、タナ王の海賊との共謀を「王にふさわしいからぬ」¹⁰⁾という。バラモン教徒の商売上の誠実さを感嘆と共に認める。当てにならぬ海上のいつ終わるとも知れぬ航海にあって暴風・海賊・停猛な野蛮人たちに曝される勇敢な商人たちの姿を追う。またそれに劣らず果てしなく恐ろしい地上の旅で、無人の砂漠や峻険な山岳や野獣と化物の棲まう森を、いつ襲い掛かるともしれぬ野盗の群の悪夢にたえず脅かされながら進む疲れ切った隊商の姿をたどる。あれほど情熱こめて筆をついやす東方の巨大都市——カンバルク・キンサイ・ザイトウン——は、彼にとっては何よりも素晴らしい市場だった。それら都市は、人の満ち溢れる街路と広場を、商店を、無数の船の泊まる港を、真の栄華の光のなかに誇り示しているのだった。

つまるところ、商人である。がしかしながら、その言葉はマルコの像にふさわしく尊敬の念と共に口にされねばならぬし、そこに精神の至高の徳と相反するようなものがいささかなりとも感じられてはならない。商業が新たな道の英雄的な

探求、自然と人間の困難な征服を意味した逞しい生の時代にあつて、その度量の大きな性質ゆえにそれでもって包まれることのできたある詩的な威信が、何よりもその言葉に再び取り戻されねばならない。マルコが育てていた商業精神は、我國の沿岸小都市をヨーロッパの大勢力に変貌させたのと同じものであることを忘れてならない。その精神はまた、彼にとって先駆者であり師であつた、偉大さにおいて劣らぬあの家族たちの中でと同じく、あるいは幾世紀にもわたる伝統がそこで具体的な形を取り、その性格を見事に反映させているかの市[ヴェネツィア]の中で同じように、彼の中でも、我が千二百年代を我々の歴史の最も偉大な世紀の一つにしているあの磨きのかかった天才性の徴しを帯びているということも。

マルコの書は、それをいま少し注意深い共感とともに読む者にとっては、単にヨーロッパ商業のための、アジアというあの高価な品々のあふれる広大な市場へのガイドなんぞではない。他にも少なからざる豊かな関心が抱かれているのが見られる。

かの書は、近代科学文学を開くものである。『神曲』が当時のお粗末な“冥界旅行譚”に取つて代るものであつたごとく、動物説話集や宝石の書、それに当時のでたらめな百科全書に取つて代るものである。生活の中から生活のために生まれた、偏見なき観察の賜であり、一連の具体的な問いに答えんとするものであり、すでに実証的な地理学の記録となっている。その目的の中には、雲を掴むような空想や伝説に真実をもってして代えるという意図がもう自覚的に抱かれていた。もちろん一中世人の科学であり、始まりにつきものの不正確さや臆病さはあるが、黎明期の诗情もそっくり備わっている。まだ芸術と離れることの出来ない科学である。科学は自らが征服したことを‘物語ら’なければならなかつた、つまりその興奮と驚きを表現しなければならなかつたのだから。なるほど我々の技巧はないが、我々と同じ理想はすでにある。

加えてまた、このヴェネツィア商人は偉大な真の探險家でもある。その書は、雄々しく簡潔かつインパーソナルで自己顕示の跡はなく、打ち明け話や心情の吐露は一切ない。わずかに自伝的細部がみられるのは、物語に信用を勝ち取るに必要と作者に思えたところだけである。彼にこの壮大な記録をものせしめたかの希有な経験が陰になってはいるとはいえ、それが巨大な建物の眼に見えぬ深い土台のように垣間見られるところもある。彼の位置がコロンブスやヴェプッチといっ

た人々、地球についての我々の知識を拡大した、その多くはイタリア人であった勇敢な人物たち、彼らに近いことを証明するには、彼が訪れた土地、我々西洋人に最初に語った所を挙げるだけで十分であろう。探険家として彼は最も優れた資質をすべて備えている。悠けき旅の魅力、風景や民族のオリジナリティーにたいする感覚、特徴的なもの独特なものすべてに対する愛情、そうしたものを彼のなかに感じ取られるがよい。宗教が、伝統が、風習が彼を引き付ける。アジアは彼にとって、まさしくフロベールが定義したごとく、「多様な風習と宗教の国」である。極めて稀なことなのだが、彼は賛嘆する能力を有している。生の鼓動をその無限の表われにおいて収集し考察するとき幸福だと感じる。ある種の光景に熱狂するが、それはもちろん商人の貧欲さだけからではない。交易の賑わい、商品の量と値段、個人の稼ぎと国の税収の額、これらはいかにも彼が観察するときの指標である。が、贅沢や富以上に行動を愛しているのが感じられる。人であふれる中国の都市で繰り広げられる商業活動がどれほど殷賑を極めたものであるか、その様を描写する。王侯貴族の暮らしをする大金持ちの商人のことを語りはするが、一方では、この仕事を学ぶために長くその渦のなかに放り込まれ、一日中走り廻ってようやく何ほどかの物々交換を果たして生活の資を得ることの出来た哀れな少年のことを忘れることはない。

マルコ・ポーロの書は、単なる地理解説ではない。クビライのアジア、超人的なところのあった一つの政治的・歴史的現実を物語り、それを讃えるものである。同書の中心としてまた頂点に位置しているのは、その帝国機構の叙述である。大統一国家の形成にもかかわらず常に封建紛争によって引き裂かれ、古代ローマ的な優れた普遍的統一からはその夢においてではなく現実においてますます道遠い小っぼけなヨーロッパに、力と秩序において強力な一つの教訓を垂れたのであった。

しかもマルコは作家である。その書の目的あるいは見かけの内容はどうか、そこに一つの人間存在がまとめられ、一つの性格が表現されている作品のもつ素晴らしいオリジナリティーがある。実際、書全体からその精神のプロフィールがくっきりと浮かび上がってくる。この偉大な旅行家のことを本当に識りたい者、つまり彼の精神がどんな本質的な力を備えていたか、どんな理想がかの困難に満ちた旅にあって彼を支えていたのか、眼前に次々と展開する自然と人間の生活の

無数の新たな様相を、どんな真実の光のもとに眺めたのかを知りたい者は、かの書を播かれるがよい。

*

マルコ・ポーロの時代には、最良の文学語はまだラテン語だった。文学的権威に高められた俗語のうち、ヨーロッパで最も普及していたのは、また我々の間で一番好まれていたのはフランスの言葉だった。ダンテの師ブルネット・ラティーニはそれを“最も美しい言葉”と呼び、『宝典』をフランス語で書いた¹¹⁾。そうなったのも、フランス文学の特異な魅力と商業的・政治的勢力としてのフランスの地位ゆえであつた。が、言語学的観点からは、今なおみられるロマンス語諸語の統一に対する感覚とイタリア語の国民感情の欠如を忘れてはならない。我々の言語的独立と文学語の創造のための——言い換えると祖国イタリアの建設のための——最初の闘いは、数年後ダンテによってその『神曲』でもって闘われ勝ち取られねばならなかつたのである。

マルコはその書をフランス語で書いた。より正確には“書かせた”と言うべきであろう。というのも、マルコ自身その書の最初のところで、ジェノヴァの獄で共に囚人だったピーサのルスティケッロ師に自分の回想を‘ルトレール’させた¹²⁾、すなわち綴らせた、と言っているからである。しかしながら私は、今や長いマルコの書との付き合いから、ルスティケッロの個人的貢献は最小のものだったに違いないと確信するにいたっている。その協力は、もし彼がかの冒険を共にし、自らの回想をそこに付け加えることが出来たのなら、かの書の本当の作者が誰であるかについて疑問を投げ掛けることも出来るやもしれない。あるいはまた、もし彼の文体や性質が他の作品によっても我々に知られていなかったのなら。マルコが助けを必要としたのは当然である。かくも長い年月を東方にあって過ごせば、西方のどの言語も自由に操れなくなつたと感じていたとしても無理もあるまい。だとしてもルスティケッロは、その真にして唯一の作者の慎ましくドキュメンタルな草稿を、宮廷物語作家の言葉で慣用的な文学的潤色をもって書き換えたにすぎない¹³⁾。彼が付け加えたもの——繋ぎの決まり文句・会話の台詞・様式的な戦闘描写——は、その型どおりの固定性からすぐ見分けがつく。マルコの下書きに対して彼の創造性がどれほど無力であつたかは、作品が単なる草案のままになっているところにはっきりと窺える(例えば「大海の入り口」の章を参照されたい)。

これより不幸な運命をたどった本も少ない。これが本来そうであった比類なき作品のままであるためには、つまり様々な姿が同時に一つの見事な均衡をなし、極めて異質な性質のものが時に存在する豊かで高い個性を映し出す鏡であるためには、欠くところのない完全なものであらねばならなかったはずである。ところが、その具体的な地理情報の量と重要性は、その書がまた芸術作品でもあることをあまりにも易々と忘れさせた。同書は中世——伝播は手書きに頼らざるをえず、文献学的メンタリティーに乏しく、文学的所有権の概念にほとんど無知であった時代——の科学書が曝されていたあの改竄を蒙らずにはすまなかった。しかも、その書が掻き立てた非常な関心そのものゆえにとりわけひどい規模で蒙ったのである。加うるに、もともとフランス語で書かれていたため、まず最初様々な写字生たちのフランス語の能力の影響受けざるをえなかった。次に、元のととは別の言語への翻訳や改編がたくさん生まれた。さらにラテン語版という、名誉だが危険の多いものがきた。その上に様々な改作者である。彼らはたいていすでにもう縮められ崩された形の手本を前にしていたのだが、それぞれにまた誤りや個人的恣意をそこに付け加えずにはおこななかった。かくてどの版のテキストもそれぞれまた歪められていった。こうしてもはや原本からはるかに遠ざかってしまったものがマルコの生粋の作品と信じられ、原著として翻訳と注釈の名誉を受けた。とりわけ広まったのが凡庸なヴェネツィア語訳で¹⁵⁾、これは言うまでもなくマルコがヴェネツィア人だからヴェネツィア語で書いたに違いないとの勝手な思い込みからだった。数世紀にわたるポーロのテキストの歴史は、およそ想像も出来ぬ程複雑に纏れた糸さながらである。例えば、フィレンツェ・リッカルディアーナ図書館のいわゆるヴァリエンティ写本¹⁶⁾——ヴェस्पッチの記録で有名な写本——の冒頭に収められたマルコ・ポーロは、あるラテン語テキストのイタリア語訳であり、そのラテン語本はまたあるトスカナ語テキストの訳であり、そのトスカナ語本はまたあるヴェネツィア語の訳であり、そのヴェネツィア語本はまたあるフランス語テキストの訳である、といった具合である。しかも、この悠かなフランス語本からしてすでにジェノヴァの原本から遠く隔たっているのである。最も広く普及したのはボローニアの修道士ピピーノのラテン語改作本であり、これまたある訳のまた訳である¹⁷⁾。今もし書店でマルコ・ポーロの一本を求めると多分

手渡される印刷本、一般読者向けの最近の版も、この何世紀にもわたる分解過程の明瞭な一里塚にはかならない。フランスで出版された最後のマルコ・ポーロ（ドラグラーフ、1888）は、一千七百三十五年にアミアンで出て大いに普及した一無名氏によるピピーノ版のフランス語訳のままである¹⁸⁾。イギリスでは、百十三年前マースデンによって我がラムージョのマルコ・ポーロから英訳されよく普及した版が数年前に再版されたが¹⁹⁾、ラムージョのマルコ・ポーロもまた、イタリア語になってはいるが、本質的に例のピピーノである。英語版マルコ・ポーロの最新のもの（ジ・アルゴナウト・プレス、1929）は、ヴェネツィア語訳のなかでも最もひどいものの一つからカスティリア語に訳されたものを基にエリザベス朝時代に英語に訳されたものの再版である²⁰⁾。ドイツでは一千九百七年にレムケが、マースデンによるラムージョの英訳をビュルクがドイツ語に直したものを改訂して出した²¹⁾。イタリアはほぼ八十年このかた、ル・モンニエール、ソンツォーニョ、ラテルツァ、アルペス各社によって普及され最近その十三度目の版が出た哀れこの上ないテキスト以外一つのマルコ・ポーロとて知らない。それは、少なからざる箇所では忠実さを欠く几庸な要約であり、千三百年年代初頭の人のいいフィレンツェ人読者によって個人的使用のために書き写されたものにすぎず²²⁾、自らの栄光を自覚した教養あるイタリアの眼にかの大旅行家の作品を代表するには全くもってふさわしからざるものであった。

私は一冊の専門家向けの研究書で、マルコ・ポーロのテキスト批評に係わる困難な問題を徹底的に論じた²³⁾。私の調査研究の結果、今は散逸してしまった彼の自筆稿が正確に復元されているのがみられる写本は目下のところ一つも存在しないこと、現存する数多くの稿本は——大まかに言って——二つの大きなグループに別けることが出来、それらの祖本はすでに部分的に崩れた一つの同じ原本から出たものであること、が今日では認められている。また、その原本から、したがってオリジナルテキストからも、第一のグループの祖本の方が第二のグループの祖本よりもずっと遠ざかってしまっている。第一グループは今日、写本 F²⁴⁾ ——オリジナルテキストの言語、すなわちフランスの言葉で書いていた千二百年代イタリアの作家の混成的で個人的なフランス語、が組織的に放棄されていない比較的完全な唯一の写本——と、ほとんど F に似た、今は伝わらぬ三つのフランス語コピー（F¹, F², F³）に遡る三つの大家族によって構成される。F¹からは正しい

フランス語への改作が行われ、それは今日十五の写本に見られる。F²からはトスカナ語訳が作られ、今日それに由来する十一の写本が残っている。F³からはヴェネツィア語訳が作られ、それからはおよそ種々様々なものが生まれた（印刷本は別にして写本だけで様々な言語で八十近い）。第二のグループもこれまたいくつかの家族に分かれ、それらの祖本はやはり今に伝わらない。が、これらは訓みと内容においてよりよく元の形を保っており、Fとその兄弟の誤りや欠落を大きく補い、したがってマルコの自筆稿により近づくことを可能にする。このグループでとりわけ重要なのは、私がZと呼ぶアンブロジャーナ写本であり²⁵⁾、幸いにもそれを見つけ出すことによって私は、それまで全く知られず未刊のままだった特別な重要性を有する多くの新しい箇所でもってマルコのテキストを豊かなものにすることが出来た。ラムージョのマルコ・ポーロは、今に伝わらぬいくつかの稿本に基づいており、その一つの兄弟がZなのであるが、そこに含まれるいくつかの箇所からして、この後者のグループに属すべきものである。ラムージョが用いた数種の底本を特定することによって私は、それまでこのヴェネツィア人編者によって加筆されたものと考えられていた多くの箇所が、実はポーロのテキストに初めからあったものであることを明らかにすることが出来た。

結論として、今は散逸してしまった自筆稿をO、二つのグループをAとB、それらが由来する共通の原本をO¹とすると、今日のマルコ・ポーロの編者は残念ながらO¹の復元に止まらざるをえないことは明らかである。また、そこにはAとBの批判的対校を通じて到達することが出来るのである。²⁷⁾

そうした基準に則って私が試みた版は、宿命的にモザイク様の再編本とならざるをえなかった。それぞれ異なった言語や典拠から来る諸要素を区別したまま保ち、今に伝えられているままの形にしておかねばならなかったがためである。第十回イタリア地理学会（1927年）でその版を紹介した際私は、「誰方か然るべきロマンス語学者が様々な材料に再び相応しい言語的統一を与え、一つの近代語訳に仕上げられんことを」と期待した。さすれば——付け加えて——「マルコの書の最初の正真正銘の翻訳」となろう、と。²⁸⁾

学会はその日、ならば私自身がその新たな苦労を背負いこむようにと要請した。

読者が今これをどう受け取って下さろうと、私はそれを引き受けたことを後悔していない。実際私は、これを訳することによって文献学的調査研究を進め完成

することが出来たし、ポーロのテキストを覆刻することの中でさらに大きくオリジナルに近づくこと出来た。(私の前の版と較べて改善されたいいくつかの点については、巻末のノートに解説する――ノートを付す箇所は星印で示される――。さらに詳しい解説を必要とする他の点については別の機会に取り組む)。とりわけ私が得た喜びというのは、それは思いもかけず大きなものであったが、ついに一つの統一的で忠実な言葉に書き直されることによって、同書がその本来の芸術性を回復するのを見たことであった。前の版では、私は可能なかぎりマルコの書にその全体性を取り戻した。この版では、もし私の思い違いでなければ、その美しさを取り戻した。それは、従来旅行家・科学者としてのマルコ・ポーロは知っていても、時代的制約と、実はおよそ無視し得ぬのだがその様式ゆえに、マルコ・ポーロのなかに一人の作家を見いだすことを知らなかった我が文学史にとって、まことにもって一つの失われたものの回復だといえよう。『聖フランチェスコの生涯』²⁹⁾ とて、もし千三百年代フィレンツェの名もなき一修道僧が敬虔な忠実さをもってラテン語からトスカナ語に移し替えることのなかったならば、我が文学史の中に一章を持つこととてきつとなかったであろう。私は、自分がマルコの書にとって慎ましいながらもついにその真実を明らかにした者となることを願っている。

*

マルコ・ポーロの書のような作品は、然るべき注なしに出版されるべきではあるまい。が、同書はすでに大部なものであり、それがようやくその‘美しき姿のままに’味わわれ、せめて一度なりとて、今までマルコ・ポーロが単なる名前ではなかったような大多数の人々の手にわたってほしいとの願いから、今回は断念しようということになった。読者は、「歴史・地名索引」や「地図」³⁰⁾ に、読み進めていくうえに必要なデータを見付けることが出来るだろう。私の専門外ではあるが、なるべく一般読者に分かりやすいよう、その両方とも自分で作りたいと思った。がもちろん、マルコ・ポーロに係わる諸々の学問の最新の最も信頼できる成果によって、ユールの古典的労作取って代る本格的な注釈が一日も早く世に現れることを期待するにやぶさかでない。そうした研究を易々と授けることのできる専門家諸氏に事欠かないところを見ると、その願いは今日ますます強くまた正当である。が言わんとしているのは、なかんずくもう永年来コレージュ・ド・フラ

ンスの教壇から我らが偉人の作品に注釈を施し、すでにポーロ研究に多大の功績のある優れた支那学者のことである。³¹⁾

【註(Ⅲ)】

1) Luigi Foscolo Benedetto, *Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, Milano-Roma, Treves-Treccani-Tumminelli, 1932, 'Proemio', pp. viii-xxiv. ベネデットのイタリア語集成訳の「序」。同書のリッチの英訳には見られず、代わりにデニス・ロスの「序」が収められている (Ricci pp. vii-xvii)。その理由については詳らかされていない。両版の関係については、同ロスと愛宕 (1, 「凡例」 p.1) の解説参照。ベネデットの原著 (1932年) よりリッチの英訳 (1931年) が先に出ているのは、原稿の段階で英訳されたものか。

同版は、マルコのテキスト研究の基礎を据えたことで名高い著者 (フィレンツェ大学教授、1966年没) の一般読者向け現代イタリア語訳であり、この「序」は、マルコとその書に対する自らの考えを分かりやすく述べたもの。

2) 註 3-53 参照。

3) 商売のためカンディア Candia (当時ヴェネツィアの植民地だったクレタ島イラクリオン) に赴くにあたっての弟マッテオの遺言状 (1300.8.31) に、マルコに多くの借金のあることが見える。マルコは他も親族に金を貸しており (資料 5 参照)、それら借金のかたにか・ポーロの所有権を全面的に手に入れることになる (Orlandini pp. 16-9)。

4) ユールによって紹介されたもので、1311.3.9 の判決文に見える (vol. 1, pp. 69-70; vol. 2, d. 5, pp. 511-2)。

5) 註 3-35, 36 参照。

6) 資料 4 参照。

7) 資料 1: 註 3-40 参照。

8) 「様々な偶像崇拜者について」の章、ただし文は若干異なる (Benedetto p.166; Benedetto¹ p. 287; 愛宕 (2) p. 140)。

9) ヴェネツィア・グロッソ venezia grosso: 資料 5 註 4 参照。リブラ libbra: 大=約 477g、小=約 301g、サッジオ saggio: 4.72g。

10) 「タナ国」の章: Benedetto p. 201; Benedetto¹ p. 348; 愛宕 (2) p. 226。

11) ブルネット・ラティーニ Brunetto Latini (ca.1220-1294): フィレンツェの学者公証人。

1260-66 年頃フランスに亡命し、中世の百科全書として名高い『宝典』をオイル語で編む。一方、イタリア語で書いた『修辞学』は、俗語散文の模範としてダンテにも影響を与えた。Cf. *Libres dou tresor*, par Francis J. Carmody, Geneve Slatkine Reprint, 1975 (1948).

12) <retraire>(p.3)。イタリア語<ritrarre>とフランス語<retracer>の混成語 (Benedetto¹ p. 2 : <esporre>)。

13) 註 3-42 参照。

14) 「大海への入り」の章 (Benedetto p.234; Benedetto1 p. 411; 愛宕 p. 311)。しかしながら、もしマコの草稿がこのようなものであったのなら、むしろ他の章でのルスティケッロの貢献がどれほど大きなものであったかを物語ることになる、との議論も成り立つのであるまいか。ついでながら、ベネデットは前著ではこのピーサの物語作家の役割をもう少し積極的に認めている (Benedetto pp. xxvi-vii; 註 3-42)。

15) F に近い一テキストから 14 世紀の初めに訳された写本 VA。このグループの写本をベネデットは、その影響の広範さ・永続性で歴史的に際立ち、製本の優雅さ・二次写本の多さで他のグループに勝るが (Benedetto p. c)、重要な独自の記述は何も含んでいない、小さな誤訳・補足・短縮・改編などはけっこう頻繁にあるが、その訳は全体として忠実かつ誠実である、と評している (p. cxiii)。

16) Vaglianti 写本:16 紀初頭、訳者不詳、マンデヴィルや当時の航海旅行記を取めることで知られる (Benedetto p. cxxi; Yule No. 44, p. 543; Moule No. 54, p. 511)。ベネデットによれば、F (フランス語) →VA (ヴェネト語) →TB (トスカナ語) →LB (ラテン語) →VT (トスカナ語) という過程をたどったことになる。

17) 資料 3 参照。

18) P. Bergeron, La Haye, Chez Jean de Neaulme, 1735 (cf. Hiroshi Watanabe, *Marco Polo Bibliography 1477-1983*, The Toyo Bunko, 1986, pp. 7-8; Gioacchino Scognamiglio, 'Saggio di bibliografia poliana, «L'Italia che scrive», XXXVII-10, Roma, 1954, pp. 143-8)。

19) T. Wright, London, George Newses Limited, 1904 (Watanabe, p. 57)。

20) N. M. Penzer, London, The Argonaut Press, 1929 (Watanabe, p. 40)。

21) H. E. Lemke, Hamburg, Im Gutenberg-Verlag, Dr. Schultze, 1907 (Watanabe, pp. 29-30)。

22) 5 種伝わるトスカナ語訳写本 TA の一つ TA¹, フィレンツェ国立図書館 MS. II iv 88。所有者ピエロ・デル・リッチョの書き込み (1458 年) のあることで知られる:「この書は、ヴィ

ネージャの貴人マルコ殿の航海記といい、我が母方の曾祖父ニコロ・オルマンニ Niccholo Ormanni によりフィレンツェにて書き写されたもので、同人はクリストの 1309 年に死亡、我が母は同書を我がリッチョ家に持ち来たった。小生ピエロ・デル・リッチョ Piero del Riccio と我が弟の所有になる」(Yule p. 82; Moule p. 41 ; Benedetto p. lxxxi)。オルマンニ家はフィレンツェの古い貴族、ダンテにも登場するが (Par. XV1. 89)、曾孫ピエロの名は記録には見えないとのこと (Bertoluzzi Pizzorusso pp. 328-9)。

その語彙がクリスカアカデミーのイタリア語辞典 (第一版 1610 年) に引かれていることから、「クルスカ Crusca 写本」とも呼ばれる。また、純粋な美しいイタリア語という意味で「オットイモ Ottimo」(最良) と通称され、イタリアでは 1827 年のバルデッリ - ボーニの版以来一貫してこのテキストが出版されてきた (Baldelli Boni, 1827, Bartoli 1863, Olivieri 1912, Allulli 1954, Ponchiroli 1954 等) が、厳密な批判的対校はなされないままだった。これに対しベネデットは、同写本が [トスカナ語版では] 一番古いことは認めながら、しかしだからといって必ずしも最良とは限らず、「学術書でも芸術作品でもまた恐らく一般読者用でもなく、面白いものを読む喜びを増し引き伸ばすためになされたほとんど単なる書き写し」(p. xcix) と評し、同国立図書館のもう一つの写本 TA² (MS II iv 136) の方をより優れていると判定した (Benedetto pp. lxxx-xcix)。これを受けて TA のすべての写本・刊本を詳細に対称・検討して TA² の優越性を立証し、それを底本として刊行したのがベルトルツィ・ピッツォルツォのテキストである (Bertoluzzi Pizzorusso, 1975. Cf. 'Nota al testo', pp. 325-49)。ロンキ版もそれを踏襲したもの (Ronchi, 1982)。

23) Benedetto, 'Introduzione : La tradizione manoscritta', pp. iii-ccxxi.

24) F は現パリ国立図書館写本 fr.1116。テキストは、Société de Géographie (pp. 1-296) , Bartoli (Appendice, pp. 321-432), Ronchi (pp. 303-662) に収められる。

25) ミラノ・アンブロジアーナ図書館写本 ms. Y 160 p. s.。後にムールによってセラダ写本 Z そのものが発見・刊行される (註 0-6 参照)。

26) マルコのテキストをめぐる古くからの問題の一つは、ラムージョのみに見え F 系統の写本にはない多くの記事をどのように考えるか、つまりラムージョあるいはそれ以前の編者や写字生が他の旅行記から取って付け加えたものとみなすか、それともマルコ自身の手になるものと判断するかであった (Yule pp.96-102 に詳しい)。前者の立場を取ったのが Lazari, Murray, Bartoli, Bianconi らであり、後者が Lessing, Baldelli-Boni, Zurla, Cicogna, Klaproth, Marsden, Yule らであった。後者が優勢ではあったが、バルデッリ - ボーニやユールのごとく、ジェノヴ

アの獄でルスティケッロと共に編まれたオリジナルの段階からあったものではなく、後にヴェネツィアに戻ってからいくつかの写本にマルコが書き加えたもので、それを後の編者や訳者が取り込んだ、との見方が支配的であつた (cf. Olivieri p.275)。これに対してベネデットは、現存するほとんど全ての写本を比較検討してその系譜関係を確定し、とりわけ Z 系写本と対校することによって、それがマルコ自身の手になるばかりか、ジェノヴァの自筆稿の段階から含まれていたものであり、その後のテキストはすべて、従来考えられてきたことく次第に追加・膨張・豊富化されていったのでなく、むしろ漸進的に削除・縮小・貧困化の過程をたどったと考えるべきであること、またマルコのオリジナルに最も近いのは、従來說かれていたごとく F ではなく、したがって Z と R であることを論じた (Benedetto pp. clviii-lxii, Benedetto⁵, Allulli¹ pp. vii-viii)。Terracini 1933 は、この説を言語学的観点から分析し支持したもの。

27) 以上の関係を簡単に示すと下のようになろうか (図 1)。ベネデットの研究も踏まえて、テラチーニは独自に図 2 のような系譜図を試みている (Terracini p.417)。ベネデットには、下位グループ FG (Benedetto p. lxxv) と VA (p. cxxxii) の系統図はあるが、全体図はない。

28) Benedetto p.cxxxi.

29) *Fioretti di San Francesco*: アッシジの聖フランチェスコ (ca.1182-1226) とその弟子たちの生涯のエピソードを集めたもの、作者不詳。

30) 「索引」 pp. 437-56、「地図」L'Asia di Marco polo (大判一葉) は巻末。

31) ポール・ペリオ (1878-1945) のこと。ベネデットはペリオを高く評価した (cf. Benedetto⁴ pp. 629, 643)。